

## あるボーリングマンのふるさと

土谷住雄

少し前のことになりますが、人間にも母川回帰があるだろうか、という随想を読んだことがあります。

母川回帰といえは、鮭の稚魚が生まれた川を下って大海へ旅立ち、私達が想像するより、もっとたくさんの苦勞を積み重ねて、大きく育ち母なる生まれた川へ産卵に舞い戻る、そんな意味であると思います。

岩につき当たりながら、登って来る鮭の顔は傷だらけ、尾ひれはむしれ、皮はやぶれて、それでもがむしゃらに産卵の場所を探す姿は大いに感動するものです。この本能的行動は、人類の科学を以てしても謎の多い現象であるとのこと。

私は、この母川回帰は我々人間にもあると思う、いや、あって欲しいものと思っております。

十年ほど前になりますが、私と妻と娘と三人で、私が二十五才までの青春時代を過ごしたふるさとへ思い出探しに出掛けたことがあります。これが母川回帰ほどのもの

とは、思いませんが、ふるさとをいつまでも、「慈しむ心」これが、母川回帰の原点のような気がします。

私のふるさとは、北海道の羽幌という処であります。そのむかしは、炭鉱で栄えた街でした。

昭和の初期から四十年ほどの間、主として国鉄時代の機関車の燃料炭として喜ばれる性質の石炭であったことから、先駆者達は、今では想像も出来ない、重労働と貧困の生活の中で、力強く大地を掘り石炭を産出していました。

私は、三才のころその地へ行ったということですから、二十数年間を生活した、私のふるさとです。その炭鉱もエネルギーの変革にやむなく閉山しました。同胞は全国へ散り散りに別れて行きました。

私が思い出探しにふるさとへ訪れたのは、閉山してから十五年ほど後日のことでした。無人化し、荒れて昔の面影を無くした様子に、胸があつくなり声にもならないことば

かりが、眼の前にありました。木造の社宅はすべて消えていました。ブロック造りや鉄筋コンクリート造りの建物は廃きょとなって、深い草むらに不釣り合いの姿で立っていました。草と言っても太く硬く高く、木化した様なものが生い繁り大いに驚きました。遊び馴んだ広場あたりは、熊が出るので奥へ入らないで下さい、という立札がありました。高いと思った山なみも低く感じ、遠いと思った通学路も以外に近く、広いと思っていた住宅地は、よくこんな狭いところに家家が立ち並んでいたものと驚きました。少年のころのイメージとは随分違って見えた不思議な経験をしたものでした。それでも、流れ川で泳いだあたりへ行ってみて、腕白少年が良く飛び込み台にしていた大きな岩はまったく同じ姿でそこにありました。スキーを楽しんだ小高い丘も時の流れを止めてそこにありました。

眼頭が熱くなってカメラのファインダーがくもったものでした。小学校、中学校とたくさんの思い出を詰め込んだ校舎跡には、全国へ散った人達が時折、一人あるいは夫婦で、また子供連れで訪れて、塀にも、床にも、立木にも、石にもその時の日時、住んでいるところ、氏名などを標<sup>しる</sup>しふるさと

へ会いに来たと書き残して立ち去ります。同級生や知人の名前に会ったときは思わず熱い涙が流れ落ちます。ふるさとの吸いつくしたくなるような空気にひたると、おふくろの腕の中にだかれたかのようなこれほど安心した気持ちになり、優しい気持ちになるものかと実感したものでした。

私は、「ふるさと」とは帰れば話し合える人が居て眺められる山や川がある処、そんなふうに思っていますので、語らせる人が居なくなって原始時代の自然に帰った無人のふるさとは、心の寄り処が消えたようなもので、淋しいものです。それならばと、ふるさとを、いつまでも心の中に忘れずに持ち続けようと、仲間が毎年幹事持ち回りでクラス会をやっています。例年同じ顔ぶれが集り同じような話をして酒を飲んで笑い転げたり、忘れかけたことを思い出して喜んだり、ふるさが無くなった同郷の者同志が、おのおのの心の中に大切に仕舞い込んでいるものを、見せ合って確認し合うための集りなのでしょう。

私のふるさは、閉山と言うことで無くなりましたが、この度の阪神大震災では、稀有な惨事でふるさを失った人達が多くおり、気の毒に思います。しかし、この場

合はいずれ新しく復興するふるさとであり大きな夢もありましょう。テレビ放映でその痛々しさに、胸の疼く思いであります。しかし、そんな状況の中で、ひととき光って見えるものがあり、心の安らぎを覚えます。それは、「とかく今どきの若者は」などと言われがちな若い人達のボランティア活動です。一所懸命になって被災者の人達のお世話をする姿は実に頭の下がる思いがいたします。また、たくさんの量の善意の物資も、義援金も、たくさんの人のあたたかい心がひしひしと伝わって来て崩壊やガレキを見続けている眼が洗われる思いです。

これ等の善意は、鮭で言うなら母川へのお礼に命がけで産卵に回帰する心であります。

人間なら母なる心に回帰して、優しい愛に応える善意なのでしょう。被災地で他人のためにつくす優しい心、それそのものが人間にも本能として存在する母川回帰と言えるのではないのでしょうか。

稚魚が数千万の大群で川を下り大海で生活する数年間は、大敵、宿敵と戦い、そのすき間をかいくぐって協力しあい生き延びた少数者が母なる川へ到着出来ます。人間社会の荒海も大変厳しい処です。なかなか目

的通りに進まないことばかりですが、どうか迷うことなく大いなる母川を探し当てて欲しいものと思い人間の持つ優しい本能を発掘したいものと思うのです。

(応用地質科)

